数方庭祭事考－「数方庭」の変化をめぐって－（Ⅰ）

吉留　徹

長府忌宮神社において、毎年8月7日～13日の間、社殿南側境内にある「鬼石」とよばれる長径85㎝、短径50㎝の平たい石の周囲を幟幡（幡竿）を立て抱え、持って回る「天下の奇祭」とよばれる数方庭神事(以下数方庭と記す。)が執り行われる。今までこの数方庭の由来､祭の意義については、國分直一氏が早くから神功皇后伝説、祖霊信仰と盆行事、神霊の依代、農耕儀礼といった様々な民俗事象が複合的に習合したものであることを指摘されている(1)ように、その実態については未だ解明されていない部分があり、様々な見解・解釈がおこなわれ、諸説混在しているのが現状である。

数方庭が山口県無形民俗文化財指定（昭和59年11月2日山口県県教育委員会告示第4号指定）となった際に、その由来伝承を「仲哀天皇と塵輪の伝説と高麗国王の怨霊伝説」と忌宮神社社伝を根拠にしているが、その由来ははっきりしていない。また、文献資料についても、「中世の文書には見当らず､近世長府藩となってからの「毛利家乗」の天和3年（1683）長府毛利3代藩主綱元の時代に出された衣食住の倹約令の中に数方庭に関するお触れが初見」として、近世期初頭にはおこなわれていることが確認されるものの、それがいつ始まったのかは不詳である。さらに、数方庭がおこなわれる祭祀空間の中心にある「鬼石」についても新羅から来襲してきた「塵輪の葬所とされるが、鎌倉時代の境内絵図には鬼石の記載はない」とされ、その起源について明確な言及はされていない。(2)

一方、数方庭を担う数方庭保存会・忌宮神社では「数方庭は今を去る約千八百年の昔より郷土の神事として受け継ぎ伝えて来た勇壮典雅な古式で、神社の誇りであるばかりでなく郷土の誇り」(3)として、その由来伝承としては新羅の塵輪が熊襲を扇動して豊浦宮を襲ってきた際に、仲哀天皇がこれを射落とし、矛をかざし旗をふって塵輪の死体の回りに輪をつけて回ったのがこの祭りの起こりであるとし、塵輪の首を切って埋め、その上に大石を置いたが、塵輪の顔が鬼に似ていたので、これを「鬼石」と呼んで、以後出陣、凱旋時にはこの鬼石の回りを踊り回るのが儀式となり、これが数方庭であるとしている。(4)そのため神功皇后が三韓出陣凱旋の際に「鬼石」の回りで舞ったという伝承も有し、「無病息災・厄難災除・神人和楽の神事」をその祭事の意義としている。

ところで、数方庭の文化財指定にかかる経緯は、「山口県指定文化財保護顕彰規定」のなかで昭和32年（1957）には民俗資料として認定され、その契機に「数方庭保存会」が組織されている。しかし昭和40年（1965）に「山口県文化財保護条例」が新しく施行されるなか、上述の顕彰規定で認定されたものが解除され、数方庭も一旦解除となる。その後、昭和45年（1970）に旧下関市無形文化財(民俗資料)、昭和59年（1984）には山口県無形民俗文化財として指定され、現在に至っている。

神事あるいは文化財指定として、その祭事を継承維持する組織については、1980年代から90年代にかけ、過疎化・少子高齢化が進むなか、従来の祭事を担う人々が減少し、氏子（家）から個人あるいは団体、企業等々へ、氏子地域だけでなく誰もが参加することができるようにと、「見る行事から参加する行事へ」拡大する方向へ変化し、同時に、地域振興へ繋がるように、その保存継承を担う「伝承母体」(5)の変化を余儀なくされながら、祭事の維持をおこない、現在も活動を続けられている。

本稿では、まず従来語られていた数方庭に関する研究や言説を整理し、現在伝承されている数方庭について再検討を試みたい。

1．問題の整理

数方庭の由来については、江戸時代末の国学者近藤清石氏(6)の手によって書かれた「数方庭の由来」（忌宮神社境内にある明治36年（1903）建立された石碑文）が、恐らくはこの行事について近代以降客観的にみた最初の見解であろうと考えられる。近藤は「御社（忌宮神社）に神宮寺及び七塔頭ありし頃、七日より十六日まで念仏講修廿しを以て自其方に移れるにて有べき、其方の法楽ならば結願の日迫踊るべき事なり。さるを此の頃十三日を限りとあるは名は怪しけれど･･･」（括弧内筆者）と特に日程が13日（旧暦7月）となっている点を訝しく、またこの行事を念仏講修としての法楽であると捉えている。

昭和4年（1929）に防長史談会を組織された小川五郎氏も近藤の説を支持し、「二宮年中祭祀之行事」、「七月御神事御能御法度条々」（『長門国二ノ宮忌宮神社文書』天正9年7月10日付）、年不詳三月廿四日付栗屋元勝外二人連署状「長州二宮七月大念仏大神事之儀」（『長門国二ノ宮忌宮神社文書』六四毛利家奉行衆書」）の例を引きながら、その祭日が7月（旧暦）におこなわれている点に着目し、念仏講修の行事であるとし、さらには「魂祭りは死んだ近い親族が帰ってくるから魂祭りであるというが、此れだけでは近頃の考へである。以前は其帰ってくる魂の中に悪い霊も混ざって戻って来ることを考えて居た。其為に悪霊を退ける必要があったのだ。此悪霊退散の為の踊りが念仏踊りである。」あるいは「鉦を敲いて新盆の家の庭で輪をつくって踊る事は神祭りと同一。月夜の晩に雨傘をさしたり、踊りの中心に柱を立てたりする。神を招く時には中央に柱を樹てて其まはりを踊って回るのが型である。」という折口信夫の「盆踊りの話」(7)を引用しながら、鬼石が魂の依代であり、神事の特長である幟幡と切籠燈籠は招魂の具として「数方庭は大念仏即ち念仏踊の変形であって俚俗の盆踊と同じものである」としながらも、その淵源はさらに古い招魂鎮魂儀式であると文献資料に民俗学的視点を取り入れたものとして提示している。(8)

これに対し、國分直一氏は数方庭の「スホウテイ」という名称や幟幡の形態そのものに着目し、弥生時代中期前葉の小銅鐸（銅鈴）型土製品と鳥型の組合せを有した鳥杆にその起源を求め、人類学・考古学的視点から北方霊鳥信仰の流れをくむ、古代朝鮮半島でおこなわれていた蘇塗（ソルティ、スサルティ）信仰(9)の系統を伝えているもので、「韓国の蘇塗行事が農耕行事であることからみて、本来的には農耕的意味をもつ行事から展開しているもの」として、北浦沿岸地域でおこなわれる風鎮祭に「鳥の羽をつけた鳥竿をかかげた幟舞」がおこなわれている事例から、「本来的には、農事にかかわりのある祭事として、海峡沿岸地帯に定着したものが、忌宮神社の祭事において変容したもの」と結論している。(10)

伊藤彰氏も國分直一氏を支持し、「スホウテーは名実ともに朝鮮半島の祭事である可能性が高く、家レベルでおこなわれる漁婦のタナバタ習俗と村レベルに行われる農民の鳥竿習俗が複合した祭り」であると指摘している。(11)

また、数方庭の祭事全般について言及した宮崎敬義氏は「男の子が生まれると幟を、女の子が生まれると切籠を出し、健やかな成長と幸福を祈る、安産の神様（神功皇后）の御加護をいただいて誕生した子がこの（忌宮神社）広庭に集まって元気な姿をご覧いただき、仲哀天皇が塵倫を射ち倒した武勇と三韓凱旋された神功皇后の雄々しさにあやかろう」と「数宝庭」という名称や数方庭の大幟につけるダシ（細長い旗）を安産の腹帯に用いた民間信仰より安産信仰、子育て信仰があることを指摘している。(12)

これらのことより、数方庭の由来伝承・祭りの意義について、

Ⅰ精霊を招魂鎮魂するための念仏踊という説

Ⅱ韓半島の蘇塗系の農耕行事の影響を受けた風鎮祭が変容したという説

Ⅲ八幡信仰・神功皇后伝承を背景とする安産・子育て信仰という説

に大きく分類できよう。しかし、数方庭の伝承者自身あるいは数方庭を観る人々のなかには、数方庭の由来や祭りの意味として、伝承者あるいは参与者（祭りを見に来た見学者）自身からの直観的あるいは心意的な語りとして、①男根説：幟幡をもった男の格好が男性器を思わせる。天につけぬけるパワーと力で子孫繁栄や地域の安寧を祈願するための祭りである。②稲穂説：幟幡はたわわに実った稲が垂れる形を表象化したもので、農耕行事として、豊作祈願のためのもの。というなど、現在伝承として、従来の塵輪伝説以外にも様々な言説が語られる。(13)

2.「数方庭」の現在－現在伝承される数方庭祭事

そこで、まずはこのような様々な見解がとられている数方庭行事であるが、現在の数方庭が実際どのような神事となっているのか、平成25年（2013）におこなわれた数方庭行事を通し、その準備段階から祭り全体の様子を見てみたい。(14)

現在の数方庭を担う集団は数方庭保存会（会長島本英昭氏）と奉仕者より構成され、約230名以上の人々によって支えられ、忌宮神社（下関市長府宮ノ内1-18）が事務局となっている。昔は忌宮神社の氏子だけであったというが、昭和38年（1963）頃から企業も入るようになったという。現在は①清遊会②若人会③長府商店街④千鳥の4団体より構成されている。地域や氏子は関係なく誰でもやりたい人であれば、会員になれるという。ただ準備等々に参加できる人でないと実際は保存会に入るのは難しいという。

祭り当日までの準備

数方庭の中核ともいえる大幟（オオヤ）といわれる幟幡の製作を中心に筆者が実見した清遊会を中心に見ていく。

6月30日　タケキリ（竹伐り）

数方庭に使用する孟宗竹60本程度を伐りに行く。本来は7月第1日曜であるが、今年は6月30日に行く。清遊会は才川までトレーラーを使って伐りに行く。吉田（下関市吉田）方面まで行く団体もある。

竹は生育が3年以上経過した竹でないといけないという。2年位経った竹は大きさでは良いが、しなれて駄目だという。伸びの良い竹を持ち手自身が選んで伐る。良い竹は谷間や雑木のなかに生えたものが良いという。今は竹の根元から掘り起こしてとる者もいるが、昔は掘り起こすようなことはなかったという。タケキリノコ（竹伐り鋸）で根元から伐る。大きなものは30m、重さ90kg以上になるという。昔は孟宗竹のような大きな竹でなく、真竹を使っていたという。孟宗竹に繋げるグルリとよばれる竹（真竹：細竹）は現在、神社で一括購入している。

伐った竹は神社に運び、境内にある石舞台（コンクリート製の台）の上に並べて置く。持ち手となる各々が自分の竹をタケアライ（竹洗い）の日まで、2週間ほどかけて、竹の節をカンナ（鉋）などできれいにとって作りあげる。竹の根にはマジックで名前、グループ(15)名が書かれてある。なお、女性が持つとされるキリコ（切子）の竹は西市に清遊会の人の山があるので、そこから50本ほど伐

ってくる。(今年は8月4日)。8月6日に忌宮神社敬神婦人会の人によってキリコの飾り付けが神社社務所にておこなわれる。

7月6～8日　サクヅクリ（安全柵作り）

土、日曜日、人が集まれる日に大幡が倒れて観客にあたらないように安全柵をつくる。通常は神社境内内にある「鬼石」の看板、柵を外して「鬼石」を中心にその周辺を囲むように柱（丸木材：杉材）を19本建て、綱を回した安全柵を作る。(図1忌宮境内図）毎年安全柵の設置する場所は例年決まっているという。

安全柵づくりは、7月3日頃、現在では大林組などに頼み、高所作業車（クレーン車）を入れて作業をおこなう。それだけでも7～80万円は必要で、数方庭を実施するだけでも300万円は必要であるという。

柵に使う柱は、昔は宝物殿の下に置いていた。柵の柱位置は160cm間隔で、円形になるよう組み、シマという各団体(グループ)の幟を置く場を設ける。丸木材は60cmばかり穴を掘って立てるという。通常は海砂を入れて置き、祭りの時だけ砂を取り出して建てる。

昔は安全柵はなく、箱のようなものがあって、それに入れていたが、台風になって倒れてしまい、昭和30年代頃に安全柵になったという。昔はロープ1本だったが、3本するようになった。練習をすることもなく、ぶっつけ本番でおこなっていたという。それ以前には正面石段松に大幟を立てかけていたという。今のように安全柵がないので大幟を持つ人の回りに補助が十数名いて、幟が倒れると倒れないようにそれを支えていたという。

7月13日　タケアライ（竹洗い）　オオヤ（大幟）に使う竹を洗う作業

朝8時に境内集合、保存会会長の指導のもとに竹を洗っていく。20～30代の若い世代が中心となって5～6人が1列に並んで石舞台に置いてある竹を、手前から順に1本ずつ運び地面に置き、10本ほど並べて洗う。基本は自分のグループが使用する竹を洗うが、清遊会内で参加できない他グループ分も参加者全員で一緒に洗う。

保存会会長、副会長がホースを使い、水を竹にかけていく。竹の周囲に皆がしゃがみ込み、タオル、ナイロンパーツで洗い、横拭きで拭いてきれいに磨きあげる。それは神様に奉納するためのものだから清浄にしないといけないという考えと同時に、夜暗いなかで竹が目立つようにという意味合いがあるという。洗い終わったら、ウマ（金属製の台）にのせて全体に水をかけて仕上げる。終了後、石舞台に奥から置いていき、次に洗う竹を手前から出して同様に洗っていく。この作業を全体で5回ほど繰り返しおこなう。1時間経った頃に休憩、お茶・スポーツドリンクの差し入れが参加企業よりあり、10分後再開。

オオヤに使用する竹はダイとよばれる孟宗竹と幡や飾りをつけるグルリという真竹から成り立っている。ダイの洗いが49本終わったら、今度はグルリを20本位の単位で、ダイと同様な方法で洗っていく。またダイと同様、グルリにも自分のグループと名前を書いておく。86本のグルリを洗い、10本程度で束ねて石舞台下に置いておく。

昔の竹洗いは壇具川(16)に持っていき、洗っていたという。昔は各家ごとに準備をおこなっており、自分の家に竹をおいていたが、今は共同でおこなう。この時期になると家の前に幟竹が立っていたという。

竹洗いが終了すると、15 日の週から 24 日頃までに各々飾り付けがおこなわれる。

7 月 23 日　タケツナギ（竹繋ぎ）　ダイとグルリを繋ぐ作業

午後 5 時　三々五々集まってくる。グループの 4、5 人が集まると、ダイ（大幟の竹）を石舞台から出し、ダイの節部分を小さなカンナやノコを使い削っていく作業から始まる。この日は清遊会の 25 名が参加する。

ⅰ）ダイに使う竹のしなり具合を見て、向きを決める。竹の根の部分を持ち、竹の先端部分の曲がった方向が上に来るような位置を決める。位置が決まったらマジックで印を入れる。

ⅱ）ダイとグルリを合わせる位置を決める。ダイとグルリの節回りがだいたい同じ大きさのところで位置を決める。ダイとグルリのしなり具合を見て、同方向に曲がっているかを目見当で確認しながら、グルリの根元部分にノコで縦目の印を入れる。

ⅲ）グルリの切目から、タケワリ（竹割）で十字に割っていく。5 節目位まで割る。内側の節部分をカンナ、小刀で削っていく。

ⅳ）グルリの根元部分を紐で仮留めして、ダイに入れていく。二三度力を入れて、引いては押して、ダイにつけた印の所まで、グルリを入れていく。

ⅴ）ダイの印の所までグルリを入れたら、紐で縛っていく。端から 7 節目のところまで縛る。竹がずれないように隙間に竹材（20cm × 5cm ほど）を入れ、縛った後に数人で持ってみて位置を確認する。自分がオオヤ（大幟）を持って立った時に、自分の後方にまっすぐグルリの先端部分が伸びていくよう、左右にずれないようにシン（芯：中心）を決めていく。

ⅵ）位置の確認が終わったら、再び降ろして、シンに来るようグルリを回転させ、本縛りをおこなう。本縛りはグルリの根元側から、竹の各節の中心部を木棒で紐を回しながら締め上げていく。締め上げたら仮留めしていた紐や隙間に入れた竹材を外し、フィラメントテープで節端の 2 か所を留める。同じように順に各節ごとを締め上げていく。終了したら、繋いだ竹を元の石舞台に戻す。昔は紐だけで繋いで締め上げており、手から血が出るほど堅く留めていたという。

これら一連の作業は、保存会会長を中心に年配の経験者が若い人の指導をおこなう。竹を繋いだ状態を会長に見せ、了解をもらったら次の作業に取り掛かる。年配の人達は慣れているので、自分たちで進めていく。

自分のグループのツナギが終われば、解散。時間がある人は他のグループのところも手伝う。基本的には自分のグループが持つオオヤは自分達（自分の持つオオヤは自分）で製作する。若い人達のなかには今回初めて参加する者もおり、保存会会長が手本を示しながら指導して作らせる。「若い人達はまだ素人だからきれいに作ることはできないのは仕方がないが、自分で作るところに意味がある。」ということを指導しながら教える。

午後 7 時　全体のツナギが終了。明日の連絡とその作業に使用する紐の用意をおこない、解散する。若い人達にとっては、土日に作業に出るより、仕事が終わった後に少しずつ作業をおこなう方が良いという。

7 月 24 日　ヒモマキ（紐巻き）　ダイとグルリを繋いだ竹に紐を巻いていく作業

午後 5 時 30 分　三々五々人が集まってくる。集まってきた人からヒモマキをおこなう。各々自分のグループに別れておこなう。クレモナ製径 5 ～ 6 ㎜の白紐を使い、繋いだ竹に巻いていく。

ⅰ）金属製のウマを出し、その上に繋いだ竹を置く。ダイとグルリの結着部分から節７つ目のところを起点に、グルリの先端側からダイの方へ向かって、テープを張った節間を紐で巻いていく。繋いだ中の竹がはじかないように巻いて締めていく。紐を繰り出す人と紐を巻いていく人と２人１組になって巻いていく。

紐は右巻き、左巻きが決まっているわけではなく、紐が重なりあわないように、節間に巻いた紐を両手で巻き締めていく。昔はテープがなく、最初から紐で巻締めないといけないので、手がしびれるほどで大変な作業だったという。

最初の節間部分の巻きが終了したら、２～３つほど結び目を作り、節の部分を避け、次の節間部分に同様に結び目をつくって巻いていき、７つ巻目（結び目）をつくる。途中で紐が足りなくなったら、紐を継足して巻いていく。

ⅱ）グルリの最後の部分は、巻いた紐の間に細い紐をＵ字に入れ込み、そこに紐の末端部分を通し、引きあげて締めて結ぶ。その後ビニルテープでヒモマキしたところを巻き上げて完成。グループの紐巻きが終了すれば順次解散していく。基本的には自分のグループのダイは自分のグループ、自分のダイは自分で準備する。自分のオオヤの準備が終了すれば、他に用事があれば、帰る者もあれば、そのまま残って若い人達の作業の手伝いや遅いグループの者の手助けする者もいる。

午後８時30分　清遊会である神戸製鋼は６本、山口銀行３本、西信用金庫３本の計12本を巻き終えて終了。安全柵のなかに入れて置く。なお、神社内には清遊会以外の団体が来て、オオヤをつくっている。また太鼓の練習も20日前より氏子域の人達により八坂神社嘯風館でおこなわれる。

８月４日　カザリツケ（飾り付け）　オオヤ（大幟）に鳥毛・鈴・旗をつける作業

オオヤの飾り付けは、大安、先勝、友引きなど日の良い日を選んでおこなう。

午後12時　清遊会のオオヤの飾り付けはほとんど終了している状況であったため、実見した千鳥会の飾り付けの作業手順について取り上げる。

ⅰ）作製した竹に竹筒（ポンポラという。ダイより一回り大きい、節を取った一節分の竹の筒）、ダシ（飾り旗：朱色）、ハタ（幡：白布）を通す。

オオヤの先端に鳥の羽根をつける（千鳥会では仏壇のハタキの柄の部分をはずした鳥毛部分を毎年使用）。竹棒をあて、白紐で10巻きした後、少しあけて同様に巻き上げていく。

ⅱ）ダシのところまで巻いてくると、そこで止めて、ダシがずれないように紐で一緒に結んで留める。９ヶ所の巻き上げができる。

ⅲ）ダシと鳥の羽根の中央、やや赤い旗よりのところに鈴をつけ、紐で結ぶ

ⅳ）結び目のところを白ビニルテープで巻いていく。

ⅴ）白旗ハタの位置（13個の耳がついている）を決め、竹と結ぶ。ハタがつく部分の節はナイフできれいに取っていく。

ⅵ）ハタの裾（ハタは一反あり）を絞るようにすぼめて、ポンポラの位置にくるところを目見当で絞りあげて紐で結ぶ。

ⅶ）残った裾の部分を折り畳み、ポンポラの長さに合うように折り、それをポンポラに巻きつけて紐で巻いて結んでいく。

ⅷ）ポンポラが移動しないように、ポンポラの少し上の部分にスポンジを巻き、ビニルテープで留めていく。

ix）飾り付けが終了したオオヤは逐次安全柵のなかに入れ、根元部分を整形する。ウマ（木の台）の上に根元部分をのせ、マジックで中心となる基準線を入れ、電動ドリルでM型になるように穴をあけ、ノミ、ハンマー、ノコを使用してM字に伐っていく。最後にヤスリを使いきれいに整形する。午後５時終了

８月６日　ノボリバライ　神職によるオオヤ（大幟）のオハライ・安全祈願

忌宮神職によるオオヤの祓い式。安全柵のなかでオオヤに向かい八つ橋を据え、神事をおこなう。
午後５時　日新運輸工業がおこなう。管理職以上のものが集まって安全祈願をする。神事が始まる前に保存会会長が酒と塩を竹の根元に注ぐ。

【神事の流れ】

①酒・塩・米をおいた三宝および黒箱（なかに切麻［キリヌサ］が入っている）、玉串、幣を置き、神事がはじまる（祓い清め式）。

修祓（低頭）二拝・祓詞・二拝　幣を持ち、神前および参加者の前で左右に振る。

オカグラ（神楽）　オカグラ（笛を吹き）を上げる。

祓詞　　オオヤの前にて二拝・安全祈願の詞・二拝
神職が幣を持ち、オオヤの前に行き、左右に振る。次に三宝にのせた黒箱を持ってオオヤの前で切幣を撒く。日新運輸工業がつくったオオヤがおいてある所２ヶ所で同様な所作をおこなう。

玉串奉奠　　保存会会長・管理職（2）・主要な持ち手（2）の５名

その後、御神酒を酌み交わす。

午後５時20分　終了。昔はこの後直会があったが、今はまだ会社の勤務時間なので、そのまま解散。
午後５時40分　神戸製鋼が作ったオオヤに対して、日新運輸工業と同じように祓い式がおこなわれる。最後に安全祈願を皆で誓う（この一週間安全に怪我がないように）と全員で酒をあげる。その後、竹にネームプレートを貼っていく。午後６時終了

８月７日　第１日目

境内では玉替券売場や食べ物のテント露店（ビール・枝豆・焼き鳥等）が設営され、販売されている。境内下には射的・長崎カステラボール・金魚すくい・焼き鳥・フライドポテト・くじ引き・かき氷等の露店が出ており、山口県の各テレビ局、新聞社もきている。
午後５時　オハライをした小さなゴヘイ（御幣：忌宮神社名の入った刀の鍔のような形の「数方庭奉仕之章」の名が書かれた朱印をつけた白布と小さな御幣）をオオヤにつけていく。保存会会長が鬼石の角６ヶ所に盛り塩をする。盛り塩は毎日神事がおこなわれる際に毎回置かれる。また、安全柵の柱には塩が置かれている。神事が始まるまで、各団体で竹の具合をみるなど準備をおこなう。

午後６時　　号砲（開始の合図）
午後６時30分　太鼓を鬼石のところに置く。
午後６時45分　大幟奉仕者の各員が拝殿に集まっていき、着座している。
午後７時　　太鼓の音（太鼓奉仕者）がなり、神職が境内正門より５名入場、拝殿から神殿内に着座して、神事が始まる。
①祭主　一拝　宮司が神前へ移動し、一拝　全員低頭

②修祓　祓詞を唱え、幣を持ち、各神職（祭員）を祓い、奉仕者全員を祓う。全員低頭。

③祝詞奏上　神職が祝詞を祭主に渡し、宮司が神前へ移動。祝詞を奏上。全員起立して低頭。祝詞終了後　笛太鼓の伴奏。元の位置へ移動し着座。祝詞を祭員へ戻す。

④玉串拝　宮司→保存会会長→氏子総代→清遊会（神戸製鋼）→市長→県議会議員2名→日新運輸工業→神戸製鋼代表者→西日本NTT→関門医療の計12名

⑤宮司挨拶　数方庭がおこなわれる由来、1,800年の歴史があること、それが継承されていることに感謝し、地域の人々がこの神事がおこなわれることを楽しみにしている内容を話される。

午後7時24分　終了

拝殿から境内へ神職を先頭に全員境内に出る。正門階段上で宮司挨拶（この１週間怪我がないように、神様のご加護があるように、有意義に祭りを楽しんでもらえるようにと挨拶)、市長、県会議員２名の挨拶がおこなわれ、最後に保存会会長より挨拶がある。（なお、２日目以降は宮司と保存会会長挨拶となる。）

階段下境内鬼石のところにて御神酒が神職より配される。祭員がそれを飲む。御神酒を竹にかけて清める。

一番太鼓

午後7時30分　境内鳥居下より幣をもった神職を先頭に塩を撒く神職、笛を吹く神職、その後に「惣社組」・「数方庭」と書かれた提灯を持った者子ども２名、肩に太鼓を担いだもの２名（太鼓に棒を通して２名で肩にかけて運び、１名が撥で叩く。)、鉦１名（１人で持って叩く)、締太鼓（１名が持ち、１名が竹製の長い撥（竹棒）で叩く）１名が行列を組んで、境内へ次のような楽を鳴らしながら歩いて進んでいく。

「ハアー　ヤッサオーレー」と最初に太鼓の先導が声をあげ、

鉦　　ｶｰﾝ　　ｶｰﾝ　　ｶｰﾝ

大太鼓　　ﾄｰﾝﾄﾄ　　ﾄﾄﾄﾄ　　ﾄﾝﾄﾄｯﾄ

締太鼓　　ﾊﾟｰﾝﾊﾟｰﾝ　　ﾊﾟﾊﾟｯﾊﾟ　　ﾊﾟｰﾝﾊﾟﾊﾟｯﾊﾟ

を繰り返しながら、歩いていく。

参拝者、キリコ（切籠）を持つ人、オオヤを奉納する人が、太鼓を置く鬼石のところまで両側に並んで、神職・楽の行列が来るのを低頭して待つ。神職は幣で参加者の頭を撫で、塩を撒く。その後に太鼓と鉦が声をあげて行列する。鬼石のところまで大太鼓を持っていくと、すでに置いてある大太鼓を使って、持ってきた太鼓はそのまま境内外へ持って行く。

神職は塩を振り、太鼓の回りを清めて、次のような順番で境内の鬼石（鬼石の上では太鼓・鉦の楽がおこなわれる）を中心に時計回り（右回り）に廻る舞が始まる。

ｉ）キリコ（切籠）による舞

午後7時35分　キリコを持った集団、女性が主に回る。キリコには「七夕まつり」の短冊、色とりどりの紙で作った飾り、願いごとを書いた紙の短冊がつけられている。キリコは各家で笹竹で七夕の飾りのように各家で作ってくる者もあれば、神社から無償で貸出され、誰でも参加できるようになっている。キリコは忌宮神社敬神婦人会によって作られる。

太鼓の「トン」と音を鳴らし、「ワーッ」の楽の声でキリコがおこなわれる。キリコ舞がおこなわれている間は神官による幣と塩によるハライ・キヨメがおこなわれる。キリコは3回回ったあと、鬼石近くの砂を額につけると無病息災になるという（風邪をひかないという）。

キリコ舞の際の楽は次のとおり。

Ⅰ　鉦　　ｶｰﾝ　　ｶｰﾝ
　　締太鼓　　ﾊﾟﾝﾊﾟﾝ　　ﾊﾟﾝﾊﾟﾝ
　　大太鼓　　ﾄﾝﾄﾝ　　ﾄﾝﾄﾝ

のリズムをとりながら繰り返し、その楽が流れているなかを舞う。

途中から「ﾊｲ　ﾎﾚ　ﾊｲ　ﾎﾚ　ﾎｲ　ﾎｲ　ﾎｲ」の楽の掛け声に合わせて

Ⅱ　鉦　　ｶﾝ　　ｶﾝ　　ｶﾝｶﾝｶﾝ
　　締太鼓　　ﾊﾟﾝ　　ﾊﾟﾝ　　ﾊﾟﾝﾊﾟﾝﾊﾟﾝ
　　大太鼓　　ﾄﾝ　　ﾄﾝ　　ﾄﾝﾄﾝﾄﾝ

と次第に速いリズムで音を出していく。

舞の最後の方になると、

Ⅲ　鉦　　ｶｰﾝｶﾝｶﾝ
　　締太鼓　　ﾊﾟｰﾝﾊﾟﾊﾟﾊﾟﾝ
　　大太鼓　　ﾄｰﾝﾄﾄﾄﾝ

に変化していき、自然とキリコから次第に小幟に変化していく。

ii）ヤ（小・中幟）による舞

午後7時45分　小幟（10m未満の長さ）を持った小さな子ども、小学生以下の男の子が舞う。父親が一緒について持ち方を教えながら舞う。また、まだ小さな子どもは父親、祖父が抱いて一緒に舞う。小学生高学年になると、少し大きな中幟（10ｍ以上20ｍ未満、ほぼ大人が持つ幟竿と変わらない大きさになる）を持ち、大人が2～3名補助に入り、「左、右、流れる。」と言いながら、次に進む方向や位置などを指示しながらついていく。大人も中幟を持って舞う。

iii）オオヤ（大幟）による舞

午後7時50分　最後に自分のシマから大幟を持ち、時計回りに3周回る形を取る。2～3人が補助に入り、全体の様子、他のオオヤの持ち手にぶつからないように進行方向を確保し、指示しながらゆっくりすり足で歩いていく。途中で風が吹いたりすれば、バランスをなくし倒れるため、風の向きバランスを保ちながら舞う。1周回るのにだいたい2～3分はかかる。誰から出るというわけではないが、オオヤの小さいものから順に大きいものになる。神様に奉納するのが目的という。初日は風が強く、折れた竹もある。折れた竹は修復できないものは、それで終わり。修復できるものはその日の内に修復する。

二番太鼓

午後8時　一番太鼓が終了するとともに、境内階段下から「金屋組」に変わり、二番太鼓が入ってくる。「金屋組」・「数方庭」と書かれた提灯をもって入場し、一番太鼓と同様に神職3名（幣・塩・笛）、太鼓、鉦の順に鬼石の方にむかって行列を組んで庭に進む。一番太鼓と同様に行列を鬼石のところまでオオヤの人達が両側に並んで低頭して迎える。神職は幣を振り、塩をかけ笛・鉦・太鼓の拍子に合わせて鬼石のところまで来る。

同様に太鼓の回りを幣、塩でハライ・キヨメをおこなう。太鼓奉仕者の「ウォー」のかけ声でキリ

コが舞う。楽は同じ。
午後8時05分　キリコ舞。一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後8時15分　キリコ舞から次第に小幟へ、一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後8時20分　小幟から次第に中幟へ、一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後8時25分　中幟から次第に大幟へ、一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。

三番太鼓

午後8時35分　二番太鼓が終了し、三番太鼓が始まる。三番太鼓は「惣社組」で同様の所作でおこなわれる。
午後8時40分　キリコ舞。一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後8時45分　キリコ舞から次第に小幟へ、一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後8時50分　小幟から次第に中幟へ、一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後8時55分　中幟から次第に大幟へ、一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。

四番太鼓

午後9時　　三番太鼓終了　四番太鼓が始まる。四番太鼓は「金屋組」で同様の所作でおこなわれる。音が最後にはだんだん速くなる。
午後9時05分　キリコ舞。一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後9時10分　キリコ舞から次第に小幟へ、一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後9時15分　小幟から次第に中幟へ、一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後9時20分　中幟から次第に大幟へ、一番太鼓と同様の所作でおこなわれる。
午後9時35分　終了　だいたい30分間隔で一番から四番太鼓までおこなわれる。
いずれの日にも最後には拍手で終わる。

このような行事が、最終日の8月13日まで、毎日午後7時から9時30分頃まで同様の所作が延々と繰り返しおこなわれる。中日には人が多くなり一番賑わかしいという。特に13日は最後になるので、疲れもたまり、幟も折れたり倒れたりして激しい舞になる。なお最終日には、大幟奉仕者は社務所にて直会が開かれ、記念品が授与される。

期間中雨が降った場合には、できなかった日の分を振り分けておこなう。例えば初日の7日にできなかった四番太鼓分は次の日から一番ずつ増やして、1日に五番太鼓まで舞うようにする。そのため、後半に雨が降った場合、例えば12日に雨が降って出来なかった場合には13日の最終日には八番太鼓までおこなわないといけなくなるので、大変であるという。

幡竿について　大幟と小幟

大幟はオオヤといい、20m以上で孟宗竹であるダイと真竹のグルリから構成されている。1番重いものは100kgで長さは30mの長さがある。昔は真竹を2本継いで使っており、今のように大きなものはなかったという。女の人は竹を触ってはいけないという。現在のように企業でおこなう前は、町内が主体でおこなっていたが、その時には作った幟は家に持ち帰り、立てかけていた。

大正時代に入り、魚屋金永清兵衛が大きな幟を奉納したことから大きさを競うようになったとか、明治4年創業の割烹旅館古串屋の大将で名手といわれた神在岩男であり、保存会会長（島本英昭氏）の師匠にあたる人が大きな幟をもって境内の石段をあがってきたのが大きくなったのが始まりと諸説

ある。また、オオヤというのも「魚屋の幟」が評判となり、魚屋がオオヤに転じたものという。(17)

大幟の形式はどの団体も同じような形であるが、千鳥会の大幟は白く磨きあげているところに特徴がある。これも前述のように神様に奉納するのだから「白い」「清浄」なものをあげるという意識があり、「白い」と夜には目立って良いという実利的な部分もあるという。大きな違いとしては白い幟と鈴の間につける色のついた麻布（ナイロン製・綿）飾りのダシとよばれる小旗が各団体・グループごとで異なっている。大きく3パターンに分類できそうである。①家紋＋波模様、②会社名（社標）＋波模様、③鳥【鳳凰　二宮社章】＋波模様を染め抜いたもので、色は赤ベースに白抜きか白ベースに青か赤色にデザイン文様が入る。1本が3万円程度するという。

キリコ（切籠）も昔は各家で数方庭の始まる朝に壇具川へ行き、清流で髪を洗い、稲の葉に溜まった朝露で墨をすり、短冊に書いたものを笹竹につけていた。(18)

使用後した大幟は、昔はマスアミ（大敷網）に使用していたので、漁協の人がもらいに来ていたが、今は来ない。今は神社で処分をおこなう。キリコは各家で作って持ってきて、また持って帰っていたが、今はそのようなことはない。竹は箸にしていたという。

服装と幟の持ち方

服装は上衣が白シャツ（Tシャツ）に法被。下衣は白の短パンに白足袋。法被には各会社の名前やロゴがついている。ヒッカケという帯を腰に巻き、それに竹をつないで舞う。

大幟の持ち方は、スリ足でゆっくり動く。腰を落とし過ぎると歩けなくなるので、余り腰を落とさない。膝を曲げないように立って、絶えず大幟の先を見る。大幟の先が前に移動すれば、自分も前へ進む、幟の先が後ろにいけば、自分も後ろに下がる。

若い人がいきなり大きな竹を持つが、すぐにはできない。小さいときからバランス感覚を持って、慣れ親しまないと一朝一夕で力だけで出来るものではないという。上の世代が下の世代に技術伝承がおこなわれている。親子間だけでなく、慣れた大人が子どもに教え、小幟、大幟に徐々に慣れていって担げるようになるという。

以上簡単に行事の準備、実際の様子について報告したが、数方庭行事の大きな構造の特徴として、次の3点があげられるであろう。

Ⅰ　通常は柵があって入ることができない「鬼石」を陰暦7月6日～13日（現在は8月7日～13日）に開放する。

Ⅱ　キリコ（切籠）あるいはオオヤ（大幟）を持って鬼石の廻りを右回（時計回り）りに3回回る。7日間の間、計28番実施する。

Ⅲ　舞の順序が女性（切籠）→男性（小中幟：年少者）→男性（大幟）の順に舞う、性・年齢階梯集団的構成を有している。

そこで、これらの構造的特徴を視野に入れ、以下検討してみたい。（つづく）

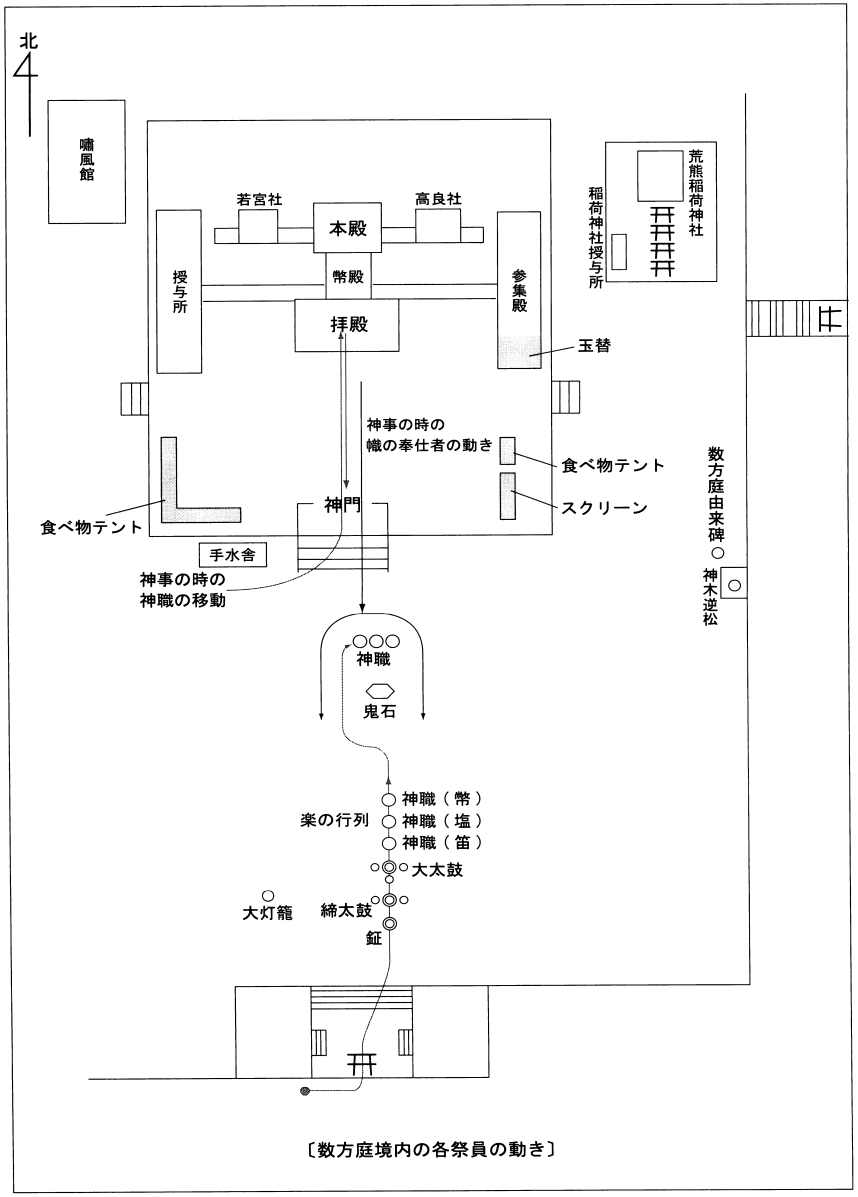
【註】

（1）國分直一「長府忌宮神社の数方庭行事をめぐる問題」『地域文化研究』第1号（1985）

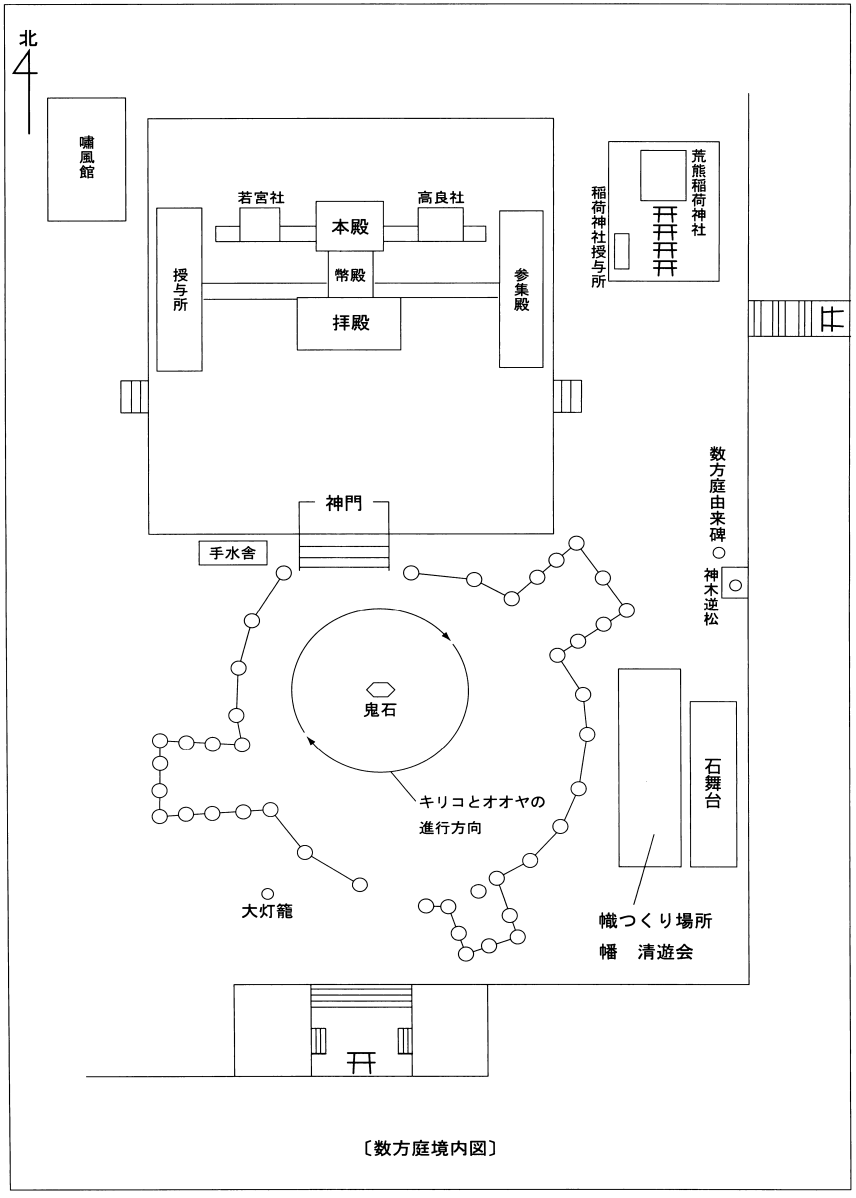
（2）『山口県文化財要録』山口県教育委員会編　山口県文化材データ

（3）「山口県指定文化財平成二十五年度数方庭祭の案内」忌宮神社・数方庭保存会による数方庭の日

程および参加するための幟幡の準備等が書いてある案内チラシ（A3 横書）
（４）忌宮神社編「豊浦宮忌宮神社略記」
（５）ここでは、昔から継続あるいは継承されているという時間的つながりを自覚的に認識し、後世に伝承していこうという意思を有する集合的集団という限定的な意味として捉えたい。
（６）近藤清石　天保 4（1833 年）－ 大正 5（1916 年）萩出身の郷土史家。維新後に玉祖神社宮司、地誌訂正取調掛となり、地誌および旧記の編纂に尽力。また、防長風土記編纂方を委嘱され、防長両国の歴史研究を精力的に行い、「山口県風土誌」をはじめ、「大内氏実録」「山口名勝旧蹟図誌」などに関する数多くの著作を残した人物。
（７）折口信夫「盆踊りの話」『折口信夫全集　第 2 巻』（1995 初版　昭和 2 年 6 月頃草稿）
（８）小川五郎「数方庭再考」『長門新聞』（昭和 36 年 9 月 9・16・23 日）
（９）蘇塗信仰について、金関恕は「祖霊信仰から首長霊信仰へ」のなかで『魏書』東夷伝馬韓条にある「蘇塗」に着目し、「蘇塗は鳥杆を立てて区画した聖域であり、その中心には恐らく一対の木彫祖霊像が祭られていた。その原型であり、（略）理想の聖所は、聖浄な森のなかの空間地にあたり、周囲の木々の梢は、時には穀霊の運搬者、時には霊の化現と信じられていた鳥禽が集まるところであった。」としている。
(10) 國分　前掲書　（１）
(11) 伊藤彰「忌宮神社」谷川健一編『日本の神々第２巻』(2000)
(12) 宮崎義敬『忌宮－長府祭事記』(1984)
(13) 今回話を伺っていくなかで、観覧者や伝承者などに由来についての由来伝承話を聞くことができた。詳細については次回に報告いたしたい。これらの伝承は従来のものとは異なる解釈であるが、いわば現在伝承としての数方庭由来伝承として位置づけることができよう。
(14) なお、数方庭についてはすでに山口県教育委員会編『山口県の祭り・行事調査』(2008) の詳細報告のなかで紹介されており、重複する部分もあるが、平成 25 年に実施された数方庭がどのようにおこなわれたのか、一つの記録として紹介した。
(15) ここでは、便宜上例えば清遊会の各企業ごとの組織単位をグループという名で使用する、いわば各団体の構成組織の単位をあらわす。
(16) 神功皇后が筑前香椎宮より還り、壇の上で祈祷した祭具をこの川に流したために、この名がついたという口碑伝説が残る。
(17) 宮崎　前掲書 (12)
(18) 宮崎　前掲書 (12)



〔数方庭境内の各祭員の動き〕



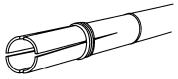
〔数方庭境内図〕

図１　忌宮境内図

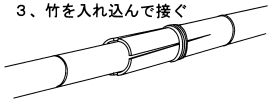
1、切れ目をぐるりに入れて竹に十字に割れ目を入れる



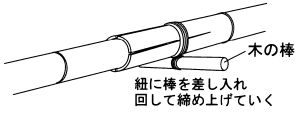
2、割った所に紐をまわす。



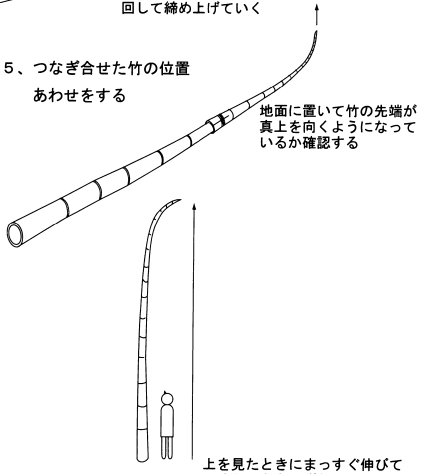
3、竹を入れ込んで接ぐ



4、印をつけたところまで入れ込んだら
紐を締め固定する



5、つなぎ合せた竹の位置
あわせをする

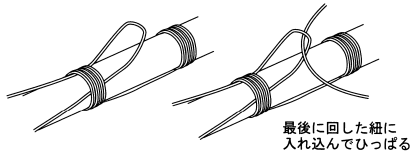


7つになるよう

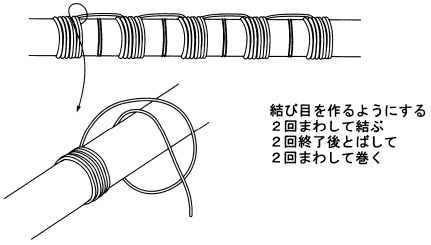


6、節７つ目から白紐で結んでいく
ちょうどテープの上に来るように紐を巻き、
できるだけ巻き目が七つできるように結んでいく。
巻き目は５～６cmの幅で継いでいく。

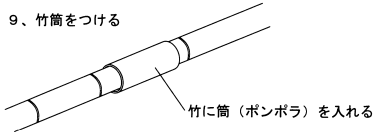
7、最後の部分には紐の間に細い縄を入れて縛りあげる



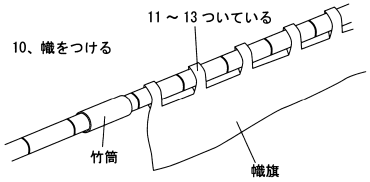
8、竹の節の間に縄が巻かれるようにする



9、竹筒をつける



10、幟をつける

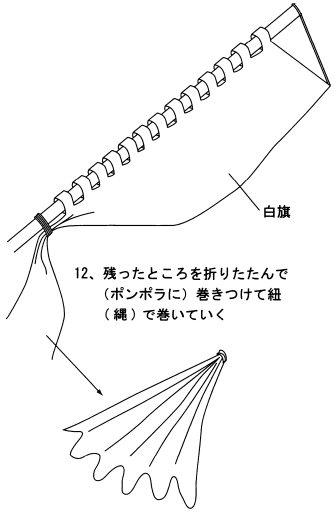


11、先端に鳥毛をつける

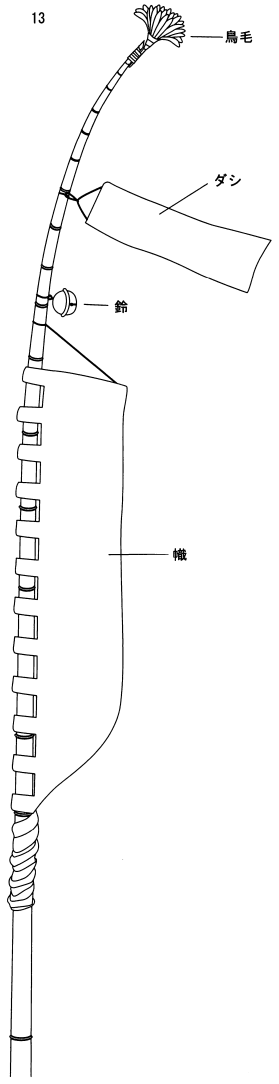


鳥毛は各グループによって異なる
仏壇のハケをつかうところもある

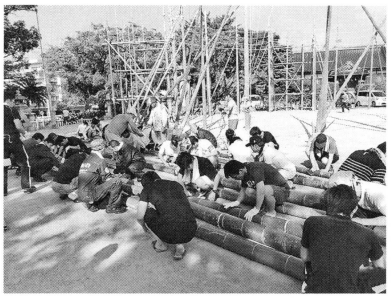
1）鳥毛をつける
2）鈴をつける（旗と鈴の間に赤い旗〔ダシ〕をつける）
3）旗（幡）を紐でまとめる
4）旗（幡）とポンポラを結ぶ



13



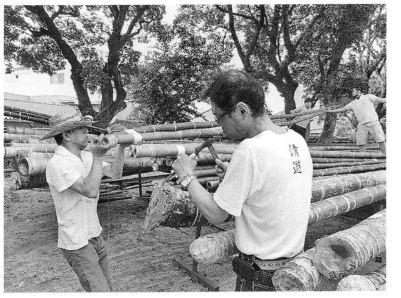
【数方庭オオヤ（大幟）づくり】



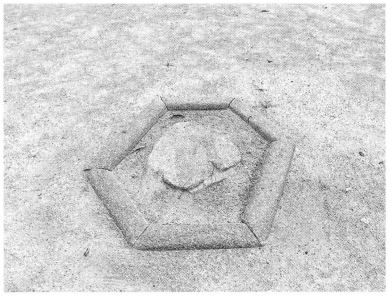
大幟準備　竹洗い



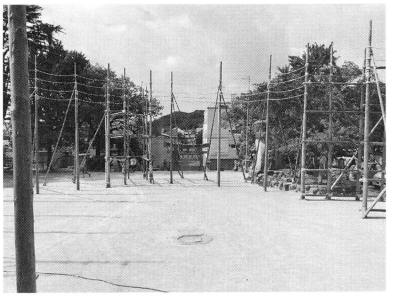
大幟準備　名前入れ（ダイ）



大幟準備　根元整形



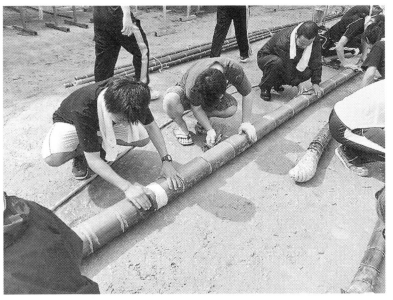
鬼石



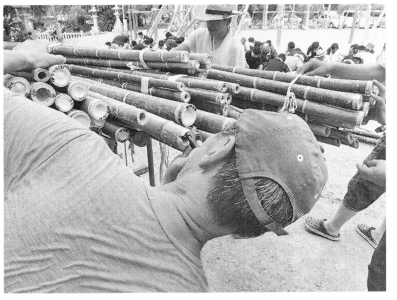
安全柵全景



石舞台　竹置き



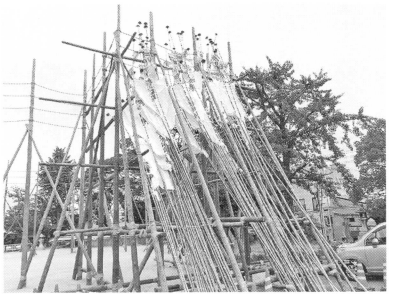
大幟準備　竹磨き



大幟準備　名前入れ（グルリ）



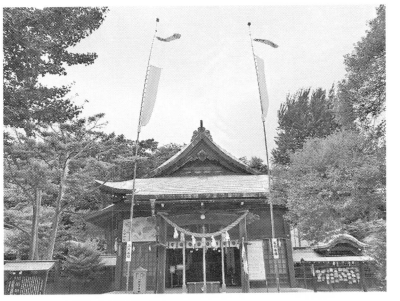
大幟準備　ダイとグルリ



大幟準備　中幟全景



大幟準備　中幟上部



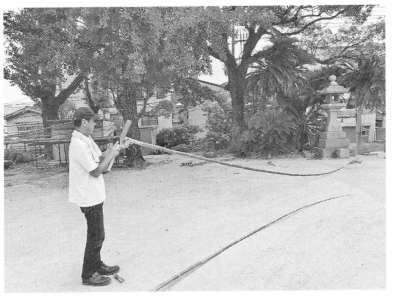
忌宮神社本殿　左：乃木家　右：毛利家



大幟準備　ダイとグルリの合わせ

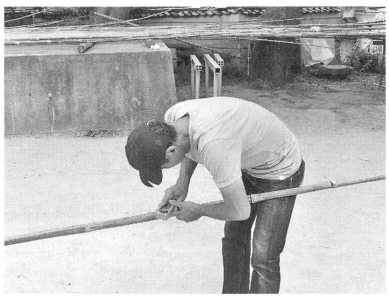


大幟準備　シナリをみる

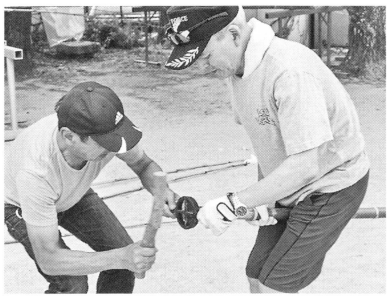


大幟準備　グルリの位置決め

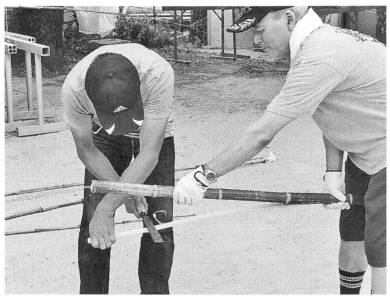
数方庭祭事写真Ⅰ



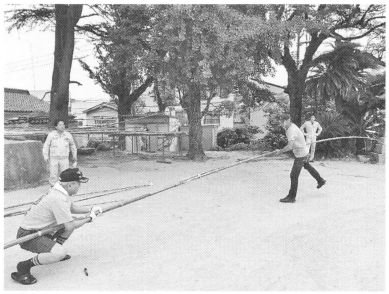
大幟準備　グルリの整形（節取り）



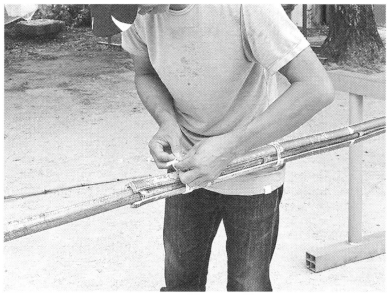
大幟準備　グルリの整形（竹割）



大幟準備　グルリの整形（内側）



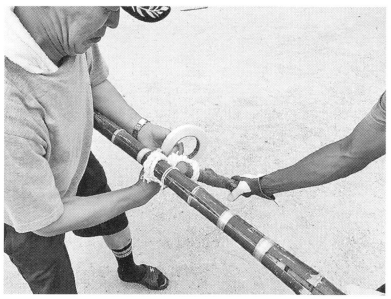
大幟準備　竹入れ（グルリとダイを入れ込む）



大幟準備　竹入れ（グルリとダイの仮留）



大幟準備　竹締め（結合部分を締め上げる）

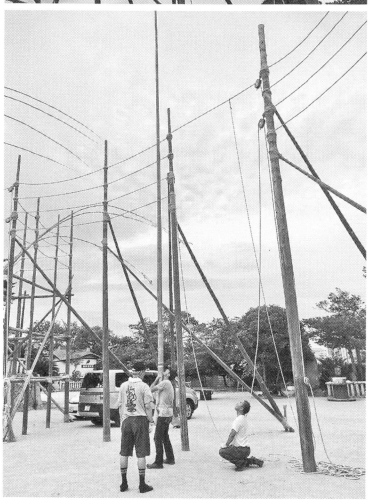


大幟準備　竹締め（テープで巻く）

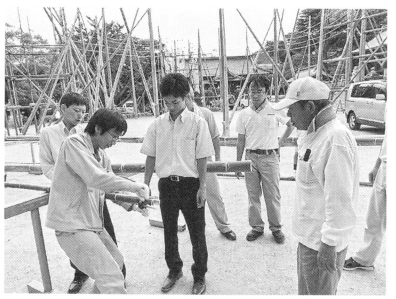


大幟準備　竹締め（完成）



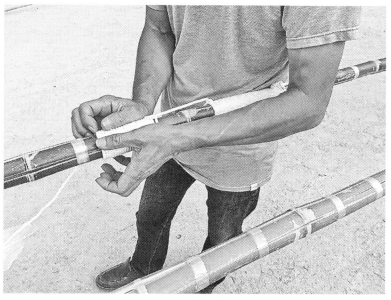


上・下：シナリをみている



保存会会長の指導

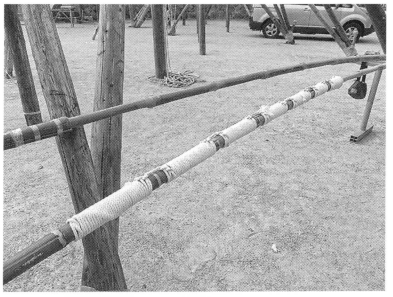
数方庭祭事写真Ⅱ



大幟準備　紐巻き



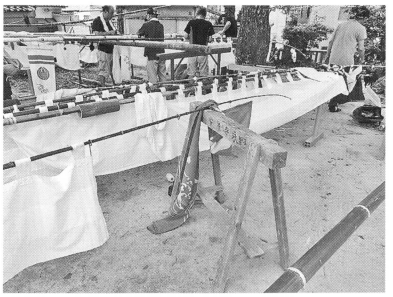
大幟準備　紐巻き（最後の部分）



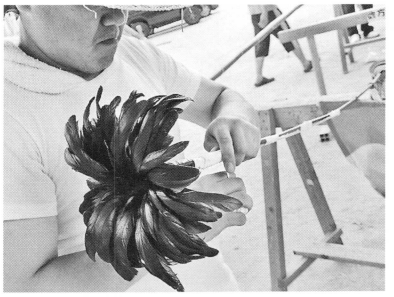
大幟準備　紐巻き（完成）



大幟準備　紐巻き（テープ巻き）



大幟準備　飾り付け（鳥毛・鈴・ダシ・幟）



大幟準備　飾り付け（鳥毛）



大幟準備　飾り付け（鳥毛）



大幟準備　飾り付け（ポンポラ）



大幟準備　飾り付け（鈴）



大幟準備　飾り付け（鳥毛・ダシ）



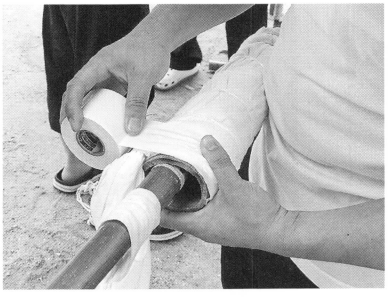
大幟準備　飾り付け（幟）



大幟準備　飾り付け（幟）



大幟準備　飾り付け（幟　ポンポラ取り付け）

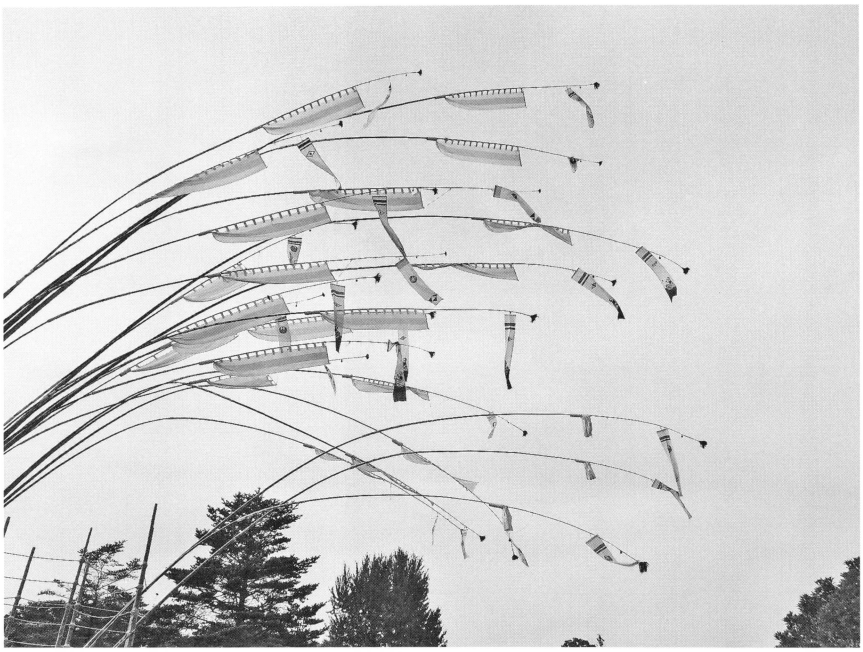


大幟準備　飾り付け（幟　ポンポラ取り付け）

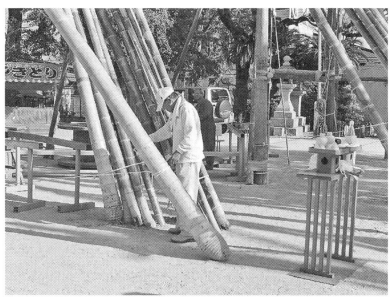


大幟準備　（ダイの整形）

数方庭祭事写真Ⅲ



大幟準備　大幟（完成）



安全祈願祭（清め塩）



安全祈願祭（オカグラ）



安全祈願祭（切幣）



安全祈願祭（大幟）



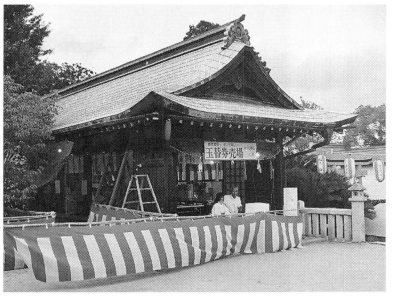


安全祈願祭　上：神事具　下：ネーム入れ

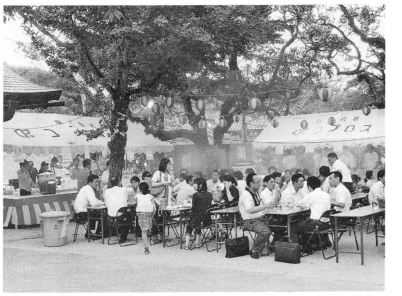
数方庭祭事写真Ⅳ



祭りを迎える長府の商店街



忌宮神社　玉替場（参集殿）



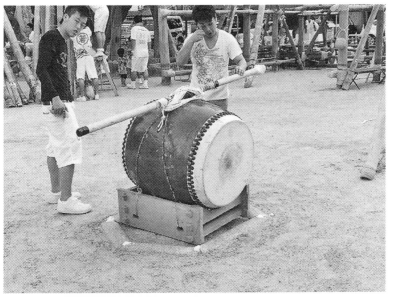
忌宮神社境内　屋台



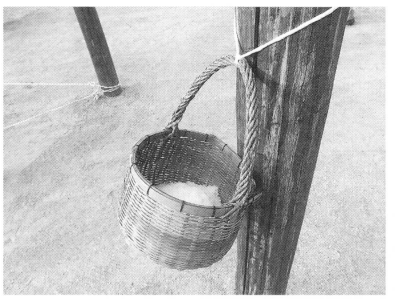
忌宮神社境内の露店



鬼石の清め塩



鬼石に置かれた大太鼓



安全柵内に置かれたシオタゴ（塩手籠）



大幟の御幣



キリコ（切籠：貸出用）



忌宮神社拝殿　神事



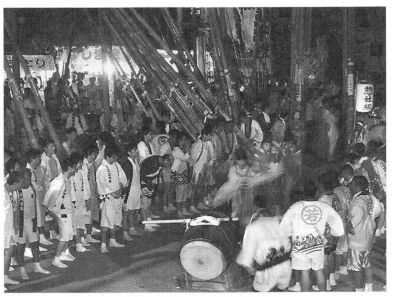
忌宮神社神門　宮司挨拶



大幟奉仕者揃い　忌宮神社境内



神官・楽入場　忌宮神社鳥居



神官・楽入場　忌宮神社境内



一番太鼓（惣社組）忌宮神社鳥居

数方庭写真Ⅴ

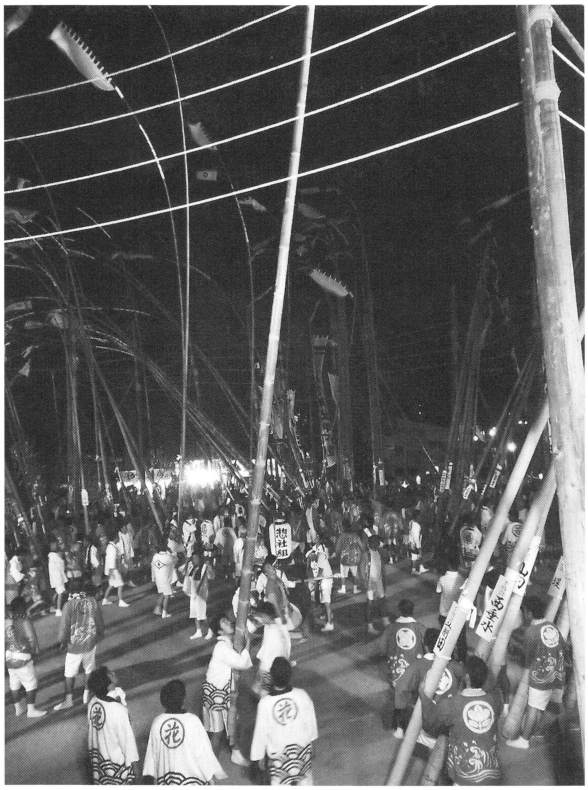




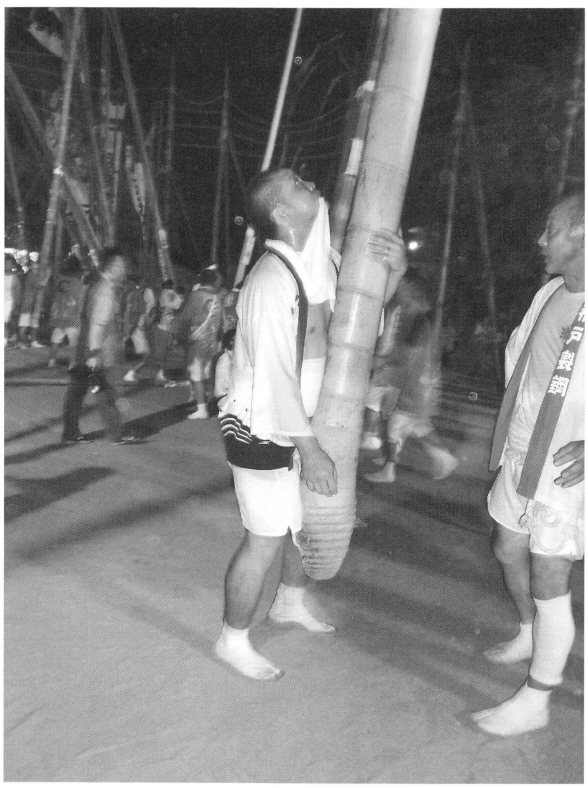




忌宮神社境内内　上より二番太鼓（金屋組）・切籠・
幟舞（中幟）・直会（社務所）



神事　幟舞（大幟）



神事　幟舞（指導）

数方庭神事写真Ⅵ

研究紀要第9号

正誤表

頁	行	誤	正
19	上から9行目	山口県県教育	山口県教育
21	上から6行目	天につけぬける	天につきぬける
29	上から11行目	使用後した	使用後の
29	下から2行目	山口県文化材	山口県文化財

追加

・14頁参考文献

松下孝幸・松下真実　2008「土井ヶ浜1号人骨・124号人骨」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム紀要』第3号　18-35頁.

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第９号

発行年月日　2014年３月
編集・発行　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
〒759-6121　山口県下関市豊北町神田上891-8
TEL　083-788-1841
FAX　083-788-1843
印　　刷　株式会社吉村印刷
〒750-0004　山口県下関市中之町5-9
TEL　083-232-1190
FAX　083-232-1189